



平成30(2018)年度水稻生育診断予測事業速報No. 1

(早植栽培 5月25日調査結果)

平成30(2018)年5月31日

栃木県農政部経営技術課

 **茎数はやや多い。ほ場をよく観察し早めに間断かん水に入る。(平年は6月第2半旬)**
 **イネ縞葉枯病の発生がやや多いと予想されているので、防除を徹底する。**

1 気象概況<<4月上旬～5月中旬(宇都宮)>>

平均気温は、5月上旬が平年を0.4℃下回ったものの、4月上旬から5月中旬まで平年より高温に推移し、特に4月上旬が3℃、4月下旬が3.6℃平年より高くなった。日照時間は5月上旬が平年比86%だったものの、4月上旬から5月中旬までは平年比99から181%と多照であった。4月の降水量は平年比66%と少なかったものの、4月下旬、5月上旬にまとまった雨があり、県内ダム貯水量がほぼ平年並に確保された。

本年は水不足もなく、移植作業は平年並に行われた。

2 調査結果<<早植栽培、品種：コシヒカリ)>>

(1) 16か所平均(表1-1～2)

ア 苗調査

苗草丈は高く(平年比107%)、乾物重は重く(平年比110%)、葉齢は平年並(+0.1葉)で、充実した苗となった。

イ 本田における生育調査

草丈は高く(平年比109%)、茎数はやや多く(104%)、葉齢は平年並(+0.1葉)。葉色は平年より淡く(-0.5)、生育診断値(葉色×茎数)は平年より小さい(92%)。

(2) 分施肥体系の生育(9か所)(表1-1～2、2-1～2)

ア 草丈は27.8cmで平年比113%と高く、茎数は169.3本/m²で平年比111%と多い。

イ 葉齢は5.7葉で平年より0.4葉多く、葉色は3.8で平年より0.5淡い。

ウ 葉色×茎数値は640で平年比97%とやや小さい。

エ イネミズゾウムシの発生は4か所で確認されたが、発生程度は低い。

オ 分けつ発生率は、主茎第2節分けつが17.5%(平年46.8%)、主茎第3節分けつは88.5%(平年29.3%)で、主茎第2節の分けつ発生率は平年よりも低い、主茎第3節の分けつ発生率は平年よりかなり高い。また、葉面積は0.15m²/m²で、平年

比135%と大きく、乾物重も11.9g/m²と重い【農業試験場調査】。

(3) 全量基肥体系の生育（7か所）（表1-1~2、2-1~2）

ア 草丈は27.4cmで平年比104%とやや高く、茎数は109.6本/m²で平年比91%と少ない。

イ 葉齢は5.4葉で平年より0.2葉少なく、葉色は3.8で平年より0.4淡い。

ウ 葉色×茎数値は409で平年比83%と小さい。

エ イネミズゾウムシの発生は4か所で確認されたが、発生程度は低い。

オ 分けつ発生率は、主茎第2節分けつが2.5%（平年26.3%）、主茎第3節分けつは65.0%（平年32.6%）で、主茎第2節の分けつの発生率は低いが、主茎第3節の分けつ発生率は平年よりかなり高い。また、葉面積は0.11m²/m²で、平年並比116%と大きく、乾物重も9.2g/m²と重い【農業試験場調査】。

3 技術対策

4月第3半旬が日照時間が少なかったものの、育苗期間中の気温が平年よりも高く経過したことから、充実した苗となった。

移植後、5月第2半旬が平均気温が平年を2.1℃下回り、日照時間も平年比42%と低温寡照条件となり、移植直後の苗の活着がやや遅れたが、5月第3、4半旬は平均気温は1.4~4.0℃程度高くなり、日照時間も162~173%であったため、水温・地温が上昇し、活着が進んだ。現在、茎数は総じてやや多めに推しているが、分施肥区で平年より多く全量基肥区は平年より少ない。また、葉齢から判断すると、生育は平年並と推定される。

気象庁地球環境・海洋部発表（平成30(2018)年5月24日）の「関東甲信地方 1か月予報」（5月26日~6月25日の天候見通し）では“気温は高く、降水量は平年並または多い、日照時間は平年並または少ない”と予想されている。今後、葉色×茎数値を適正範囲に維持するために、以下の点に注意して栽培管理を行う。

(1) 水管理

目標とする茎数（穂数）360~380本/m²（目標収量540kg/10a、総粒数30千~32千粒/10a）を確保するまでは、夜間かん水、日中止水（浅水）として水温・地温の上昇を図り、分けつ発生を促進する。

平年の間断かん水開始時期は6月第2半旬である。ほ場を観察し、目標茎数が確保でき次第、間断かん水に入る。

白未熟粒の発生を防止するとともに、登熟度を高めて良質米を生産するためには、適正粒数を確保することが重要である。初期の茎数が多く、過繁茂気味の生育になると粒数過剰となり、食味、品質の低下を招くおそれがある。適正粒数確保には間断かん水に入る時期が重要となるので、遅れないようにする。

(2) 病害虫の防除

ア イネ縞葉枯病

「平成30(2018)年度 病害虫発生予報第2号」(平成30(2017)年5月17日農業環境指導センター発表)で、イネ縞葉枯病の発生量はやや多いと予想している。また、「植物防疫ニュース(速報No.3)」(平成30(2018)年5月30日)では、ヒメトビウソウの生息密度は平年より低いものの、ヒメトビウソウ第一世代幼虫のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は県平均が6.7%と昨年並に高く、特に県中南部では10%を超える地点が複数確認されている。今後の気温も高いことが予想されることから、本病の発生拡大を防ぐため、地域ぐるみでのヒメトビウソウ防除(発生の多い地域では、箱施用剤の使用+本田での薬剤散布)を実施する。

イ イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ

イネミズゾウムシの発生が目立つほ場(移植後2週間の水田における成虫密度が株当たり0.5頭以上が要防除水準)では、有効な薬剤により防除を行う。

多雨で湿度の高い日が続くとイネドロオイムシの幼虫発生期間が長引き、多発生になりやすいことから、今後の天候と発生状況に十分注意する。

ウ いもち病(葉いもち)

取り置き苗は、いもち病の発生源となるため、早めに処分する。

(3) 雑草防除

中期除草剤の散布は、ラベルを十分確認し、使用時期に注意して散布する。

なお、MCPB等を含む除草剤は低温、シメトリンを含む除草剤は高温で薬害が発生しやすいので注意する。

除草剤散布時の水管理は、散布直前に水深4～5cmとし、散布後7日間は落水や、かけ流しをしないよう注意する。

※ 薬剤(登録農薬)はラベルの表示を確認して正しく使用する。

栃木県農業環境指導センターHP (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>)

4～6月は「春の農作業安全確認運動」の実施期間です。



高齢農業者の事故が多発しています！以下のことを心がけましょう。

- ・複数人での作業に心がけ、一人で作業を行う場合は携帯電話を所持する
- ・こまめな休息と、余裕を持った作業を行う
- ・家族や仲間から、作業者への「声かけ」(注意喚起)をする